「わたしのおかねなのに」
― 識字学級のつづりかたから学ぶ ―（学級活動）

対象：小学校高学年以上

1　題材設定の趣旨

「わたしのおかねなのに」を読み、周囲の冷たさや吉田さんの努力について友達と話し合ったり、差別により学校に通うことができなかった人たちがいたことについて考えたりすることを通して、同和問題について理解し、互いを尊重し合い支え合う生活をつくっていこうとする意欲を育てる。

2　学習のねらい（学級活動　内容　（２）イ、（３）ア、ウ　など）

(1) 同和問題の具体的な現実や苦しみを乗り越えようとする人たちの生き方にふれ、自分自身のこれからの生き方につなげて考えることができる。

(2) 吉田さんがどうして自分自身のことを語ることができたのかを考えることを通して、お互いを尊重し合い、仲良く支え合ったり信頼し合ったりして生活することについて意欲を高める。

3　人権教育の視点

(1) 識字学級の意義と活動内容がわかる。（知識的側面）

(2) 差別のために奪われた文字を取り戻すために学び続けた吉田一子さんの生き方への共感。（価値・態度的側面）

4　指導計画（道徳との複合教科単元として扱うこともできる）

時	児童の活動	指導・助言
1 2	○「わたしのおかねなのに」 （一）（二） を読み、話し合うことによって、吉田さんが苦しい生活のため学校に行けなかったことを知る。	○（一、銀行での出来事の部分）を読みそれぞれの疑問を出し合う。 ・銀行の人はどうして代わりに書いてくれなかったのだろうか。 ・吉田さんはどうして字が書けなかったのだろう。 ○（二、生い立ちの部分）を読み、吉田さんが学校に行けなかった理由を考え、話し合う。 ○「あけぼの　高学年向け６訂版　P129」を用いて、差別により学校に通えなかった事実を知る。
3	○「わたしのおかねなのに」を学習してのまとめをし、自分の生き方につなげる。	○（五、ふたたび銀行へ行く部分）を読み、自分の字でお金を出すことができた吉田さんの心情を考える。 ○長野県における識字学級の活動について知る。（「あけぼの　高学年向け６訂版」P126～129） ○これまでの学習をふりかえり、これまでの経験やこれからの生き方を語り合う。

5　具体的な活動内容（実践事例）【第３時】

A　題材名「わたしのおかねなのに」

B　ねらい

吉田さんの銀行でのつらい体験や生い立ち、識字学級での学習活動を知った児童が、「わたしのおかねなのに（五、ふたたび銀行へ）」を読んで、吉田さんの心情にふれ、感想を出し合うこ

とによって、苦しみを乗り越えていった吉田さんのたくましさやすばらしさを知ったり、吉田さんがどうして自分自身を語ることができたのかを考えたりすることを通して、互いを尊重し合い、仲良くしたり信頼し合ったりして生活していこうとする意欲を高める。

C　指導上の留意点

・資料に「あるむら」と表されている叙述があるが、本時ではその実態が同和問題であるというおさえをせず、以後の課題としていく。

D　展開

	児童の活動	指導・助言
5	○前時まで学習したことを振り返る。 ・吉田さんは自分の住所と名前を識字学級で何度も練習されたんだったなあ。	○これまで学習したことが書かれている模造紙を見ながら、吉田さんがどんなことに取り組んできたかを一緒にふり返る。
30	○「ふたたび銀行へ」を読み、吉田さんの心情について考え合う。 ・十万円と一緒に通帳が返ってきたときの喜びは、きっと生まれて一番の喜びだったと思う。 ・自分の名前や住所を繰り返し書き取り、覚えていったことが報われたと感じたと思う。 ・悔しくてもあきらめないでこの文章を書くことができたのは、順子さんをはじめ、一子さんに関わった人たちが、誰もが等しくもっている権利を守るために、一子さんを支えていたから、自信をもって書くことができたのだと思う。 ・識字学級で学んで、文字を得ていくことは、やさしさを伝え合ったり、お互いの気持ちを分かり合ったりしていくためにとても大事なことなんだと思った。 ○「一子さんとまわりの人たちの生き方から考えたこと」を視点に振り返り、感想を書く。	○吉田さんが十万円と一緒に通帳を受け取ったときの気持ちを考える。 ○吉田さんが感じた悔しい思い出などを含め、どうして自分自身を語ることができたのかを考えあう。 ○識字学級について「あけぼの高学年向け」の資料「やさしさを伝えるために」を読み合い、気持ちを伝え合うことで、生き生きとした生活につながったことを一緒に確認する。
10	○「一子さんとまわりの人たちの生き方から考えたこと」について、考えを伝え合う。 ・一子さんは、悔しい思いをしながらも、周りの支えを受けながら、懸命に文字を取り戻していた。私も何のために学ぶのか考えながら努力したい。 ・一子さんを励ました方々のように自分も人のために何かできる人になりたい。 ・互いに支え合ったり、尊重し合ったりしながら、今まで以上に気持ちよく生活ができるように協力していきたい。	○自分の経験につなげて考えている児童の考えがあったら、共感的に受け止める。

（参考：『同和問題学習展開案』（長野県教育委員会））

５　資料

『わたしのおかねなのに』

吉田一子（六十八さい）

（一）

・きょねんの　四月二十日の　あさ　です。

「きょうは　ぎんこうへ　いって、おかねを　おろしてこなくては。」

と、おもいました。

　こうせいねんきんが　三万五千円　はいっている　はずです。そこから　三万円だけ　おろしたいと　おもいました。

・そこへ　きんじょに　すんでいる　むすめの　順子がやってきました。これ　さいわいと　いつものように順子に　たのみました。

「きょう　ぎんこうへ　いくから、また　かみに　かいて。」

「なんぼ　だすんや。」

「三万円。」

「もう、いつも　あさばっかりに　いうて。いそがしいのに。」

　おこりながらも、順子は　かいて　くれました。

・それを　もって、えきまえの　ぎんこうにいきました。まど口には　わかい　女の人が　すわって　いました。

「おねがい　します。」

と　いって、かみと　つうちょうを　わたしました。すると、その女の人は　ちょっと　かみを　みて、まえのほうを　ゆびさし、

「あそこに　かみが　ありますから、もういちど　かいて　ください。」

と、かみを　かえして　きました。きんがくの　ところの　０が　二じゅうに　なって　いるから、おかねをだせないと　いうのです。

・わたしは　あわてて、

「わたし、字　よう　かかん　から、あんた　ちょっとかいて　ちょうだい。」

と、たのみました。けれども、女の人は、

「だめ　です。じぶんで　かかなくては。」

と　いって、かいて　くれません。

・わたしはもう一ど、

「わたし、字　しらんから、これ、むすめに　かいてもろたんや。せやから、あんた、すまんけど　かいてちょうだい。」

と、いっしょうけんめい　たのみました。それでも、女の人は、

「だめ　です。じぶんで、かかなくては。」

と　いう　ばかりです。

・わたしは、しかたがないと　おもって、つうちょうをひったくって　かえろうと　しましたが、もうひとり女の人が　いたので　もう　一かい　たのんで　みました。でも、その人も　いうことは　おなじ　でした。

・わたしは、もう　はらがたって　しかたがないので、

「字、しらんもんは、じぶんの　おかねも　だされへんのんか。」

と、くやしさを　ぶつけました。

・くやしいやら、つらいやら、とても　なさけない　おもいを　して、　かえって　きました。

（二）

・わたしは、大正十四年六月十五日が　たんじょう日になって　います。ならけんの　ある　むらで　うまれました。二つのとき、母おやが　しんで、やおに　もらわれて　いきました。ところが、わたし、母おやに　えんないのか、六つのとき、そこの母おやも　なくなってしまいました。

・だから、学校なんか　一日も、いっていません。「なんで　学校て　いくねんやろ。学校　いって、なにするねんやろ。」と、ずっとふしぎで、わからなかったのです。となりの　いえの子が、「ハト」とか「マメ」とか、いうてるこえは、ときどき　きこえていた　けれど、なんのことか　ぜんぜん　わかりませんでした。

・それでも　父おやに、九九だけは　おしえて　もらいました。

「字は　しらんでも　九九　おぼえてたら、もの　かいに　いったかて、なんでも　かんじょう　できるんや。」

いうて、おしえて　くれました。父おやの　まえに　せいざして　けいこ　しました。いねむり　したら、きせるで　あたまを　カツンと　やられたものです。

　そんなことが　おもいだされて、なみだがこみあげてきました。

（三）

・その日のゆうがた、順子のいえに　いってあさのことを　はなし、

「おまえが、ちゃんと　かいて　くれへんかったから、おかね　だされへんかった。」

と、ぼやきました。

　すると　順子は、

「いまから　ぎんこうに　でんわ　したる。」と　いって、でんわを　かけてくれました。

「もし　もし。」

　どうやら　おとこの人が　でてきた　ようです。でんわの　そばに　いたから、ぎんこうの人の　こえも　よく　きこえました。順子は、わたしが　はなしたことをいってから、「字、かかれへん　もんは、じぶんの　おかねも　だされへん　のですか。」と、おこりました。

・ぎんこうの人が、

「いくら　だしに　こられたん　ですか。」

と、ききます。順子が　また　おこった　こえで、

「そんな　もんだいじゃ　ないでしょ。大きな　きんがくなら　かいて　くれて、小さな　きんがくなら、かいて　くれない　のですか。」

と、いいました。

・ぎんこうの人は、

「きほんてき　には・・・・・・・・」

「きほんてき　には・・・・・・・・」

と、おなじことを　なんども　くりかえし　いって　います。順子は、たまりかねたように、

「この　よのなか、字　かける人　ばっかりと　ちがうでしょ。おたく　みたいな　ぎんこうなら、よけいに人けんがくしゅう　していると　おもうて　ましたわ。」

と、いいました。

・この　やりとりを　きいて　いると、わたしは　もう、なさけない　きもちに　なって、
「もう　いい。もう　いいで、順ちゃん。」
と、いって　とめました。
　順子は、
「しきじへ　三年も　いってて、じゅうしょも、なまえも　かけんで　どうすんの。ほんまに　くやしい　めにあわんと、ほんきに　なれへんのやから。」
と、こんどは　わたしに　おこります。
・それから　わたしは　おふろ（かつらぎおんせん）にいき、かえりに　また　順子の　いえに　よりました。そしたら、むこが　かえっていて、
「おかあちゃん、ぎんこうから　でんわ　かかって　きたで。なにか　あったんか。」
と、ききます。ぎんこうの人も　しんぱいして　くれているのだな　と　おもいました。
・字を　なんにも　しらなかった　ときは、「ああ、そんな　もんか」と、あきらめて　いましたが、「しきじ」で、すこし　ひらがなの　よみかきが　できるように　なった　いまは、くやしくて　くやしくて　なりません。もっと　もっと　べんきょう　して、なまえと、ところ　ぐらいは、かん字で　かける　ように　なりたいと　おもいました。
・あくる日、こんな　おもいは　もう　したくないと　おもいながら、順子と　いっしょに、きのうのことを　日きに　かきました。
・その　つぎの日は　木よう日で「よみかききょうしつ」の　ある日　です。わたしは　この日きを　もっていき、先生に　よんでもらい、じゅうしょと　なまえのてほんを　かいてもらいました。（ぎんこうの　かみには、じゅうしょは　かかなくて　よかったのですが）

〇〇市〇〇町一丁目７の１０の１０２
吉　田　一　子

・その日から、なんども　なんども　けいこしました。えんぴつで　大きく　かいたり、ボールペンで　かいたり、もう　なんかい　かいたか　わかりません。「しきじ」へ　いくと、まっさきに　これを　けいこ　してきました。それでも　まだ　じゅうしょが　なかなか　おぼえられません。すぐ　つまってしまいます。てほんをみないで　かけるように　まだまだ　けいこ　しなくては　なりません。

（四）

・先生は、
「この　ことは、わすれては　いけない　こと　だから、ぜひ　くわしく　かきとめて　おきましょう。」
と、いわれました。
・そこで、また　順子に　はなしして、ちょっと　くわしく　かいて　もらいました。それから、東大阪市にいる　順子のいもうとの節子にも　はなしして、節子にもかいて　もらいました。日きよりは　うんと　ながくなりました。
・それを　先生に　みせると、先生は、
「これを　もとにして、もう一ど　いっしょに　かいてみましょう。」
と、いわれました。そして　かきはじめたのが　この文しょうです。これを　かくときが　一ばん　たのしくなりました。
・「こんどは、じぶんで　かみに　かいて、おかねをだして　きましょう。その日の　ことを　かいて、この文しょうは　おわります。」
と、先生は　なんども　いわれます。わたしも、そうしたいと　おもいました。

（五）

・ことしの　三月二日の　あさ　です。四月十八日から一しゅうかん、四こくに　おまいりに　いく　ので、十万円　ださなければなりません。
・こんどこそ、じぶんで　かみに　かいて　ぎんこうへいって　おかねを　ひきだして　こようと　おもいました。
・けれど、また「まちがってる」と　いわれないか　しんぱい　です。それで　やっぱり順子にも　かいて　もらいました。もし、わたしの　かいたので　とおらなかったら、順子に　かいてもらったのを　だそうと　おもったのです。
・一ねん　かかって　やっと　ためた　十万円です。これで　だして　もらえるやろか、しんぱい　しながらボールペンに　しっかり　ちからを　こめて　かきました。
・それを　もって、ぎんこうの　まど口に　いき、おそるおそる、
「きょう、はじめて　かいて　きたんやけど、これでいけますか。」
といって、つうちょうと　わたしが　かいたかみを　さしだしました。
・まど口の　女の人は、にっこりして、
「いけますよ。」
と、いってくれました。ほっと　しましたが　まだ　しんぱい　です。
・しばらく　まえに　たっていると、
「吉田さん。」
と、よばれて、十万円と　いっしょに　つうちょうをかえして　くれました。
・生まれて　はじめて、わたしの　かいた　字で　おかねが　だせたのです。うれしくてうれしくて、なみだがでてきました。
・あくる日の　あさ、順子が　きたので、
「きのう、わたしが　かいた　かみで、おかね　だしてきたで。」
と　はなしました。順子は、
「よかったなあ。」
と、よろこんで　くれました。
・その日は、よみかききょうしつの日　です。
みんなに、
「きのう　じぶんの　字で、おかね　だしてきたで。」
と、ほうこく　しました。みんな、
「よかったね。もう　だいじょうぶや。」
と、はげまして　くれました。

・これで、この　文しょうも　おわりに　することができます。（三月三十一日）

（大阪・富田林識字学級）

【参考】

○吉田一子さんをモデルにした『ひらがなにっき』（文・若一の絵本制作実行委員会　絵・長野ヒデ子　解放出版社刊）が、人権ふれあいセンターでの識字・多文化共生学級の取組とともに、社会科教科書にも紹介されています。

○ＮＨＫのドキュメンタリー番組「ＥＴＶ特集・なまえをかいた～吉田一子・８４歳～」（2010年１月17日放送）でも、吉田一子さんの学び、生きる姿が紹介されました。

※長野県教育委員会ホームページに掲載している指導資料は、人権教育指導資料集Ｐ87～Ｐ123にある指導資料（平成21年３月に発行された『同和問題学習展開案』（長野県教育委員会）にあるものを転載）を、学習指導要領の改訂（平成29年度告示）に合わせて内容の加筆修正を行っています。

【『同和問題学習展開案』作成の上での参考文献一覧】

『部落史に学ぶ』　外川　正明　解放出版社

『いま、部落史がおもしろい』　渡辺　俊雄　解放出版社

『部落史がかわる』　上杉　聰　三一書房

『つながり　人権教育資料集Ｉ（同和問題）』　高知県教育委員会

『身分差別社会の真実』　斉藤洋一＋大石慎三郎　講談社現代新書

『部落の歴史像』　藤沢　靖介　解放出版社

『渋染一揆関係教材資料集』　岡山県同和教育研究協議会